

経営・勤務環境改善

医療従事者確保・定着のための経営・勤務環境改善研修会（第3回） 「医療DXと勤務環境・経営改善」

令和5年12月12日（火）医療従事者確保・定着のための経営・勤務環境改善研修会（第3回）を開催した。会場参加型（会場：京都経済センター）とオンライン参加型のハイブリッド開催となり、会場4名、オンライン59名、計63名が参加した。今回の研修の

テーマは「医療DXと勤務環境・経営改善」と題し、病院が実現可能なDXを考える事を題材として、国際医療福祉大学赤坂心理・医療福祉マネジメント学部教授高橋泰先生に講演頂いた。

【はじめに】

ダーウィン『最も強いものが生き残るのではなく、最も賢い者が生き延びるのでもない。唯一生き残ることが出来るのは、変化出来る者である。』の言葉にあるように、世界の動きとDX化が著しく遅れている医療業界の動きを比較しながら、医療DXの推進（医療情報システムのWeb化+クラウドサービス利用）を考えていく必要がある。

【日本の医療界のDXの現状】

政府は医療DX令和ビジョン2023の中に①全国医療情報プラットフォームの創設、②電子カルテ情報の標準化（全医療機関への普及）、③診療報酬改定DXという将来像を打ち出しているが、web利用による「クラウドサービス」を駆使したサービス提供の将来像が見えてこない。DXとは「ドラえもん」の4次元ポケットに代わるクラウド端末（スマホやPC）から、情報・サービスを取り出し、仕事や生活（医療）を豊かにすること」と定義する方がDXの目指すべき方向性に合っており、それを駆使する事こそが必要である。



高橋 泰氏

日本はDX後進国であり、世界デジタルランキングでは29位である。要因としては人材（技術者）の圧倒的な不足要因が大きい。徐々にではあるが、日本でも（中国より7～8年遅れで）DXが普及し始めてきているが、特に医療分野に関しては最も遅れていると指摘されている。患者情報等の漏洩防止を危惧し、インターネットと病院情報システムを接続しない「閉域網」という方針を進めたことにより、クラウドを中心とするインターネットに関わる技術や、クラウド・ネイティブなシステムの開発から縁遠い環境で仕事を続けるというガラパゴス化が進行した。世界ではあらゆる分野でネットを中心とした技術発展が進む中、日本の医療界はクラウドサービスへの接続を行わなかった。前述の医療DX令和ビジョン2023において将来像が見えてこない理由は、クラウド・ネイティブ開発経験の乏しい技術者により、比較的实现化可能なオンプレミス型の電子カルテシステムが大半を占めている状況であり、その厚化粧した将来プランに他ならないからである。

【DX推進の重要点】

①補助金の活用…医療DX令和ビジョン2023に関して辛口評価を行ったが、クラウド化推進病院にとってもプラスに働く改革である。今後ビジョンに沿った補助金給付が予想される。

②コストに見合うDX化…DX化推進により時間外労働の減少による人件費削減や、業務の効率化によるリハビリ単位の増加等、収益評価も重要である。一方、DX化を進めることによる弊害も評価しなければならない。

③職員のDX教育…DXを推進できる職員教育も重要。診療報酬上の理解や定期的なセキュリティ教育等も重要である。

④時期に応じた電子カルテの選択…クラウド・ネイティブ電子カルテの利点は、第1にすでに他のクラウド上で提供されているサービスや、将来提供される人工知能を駆使したサービス等との相性が良く、高機能なサービスを安く簡単に使えるようになる。第2の利点は、クラウド・ネイティブな電子カルテの導入により、院内のスマホや外部の端末から電子カルテの参照や書き込みが低価格で容易に可能となり、多職種連携が期待される。第3の利点は、

クラウド・ネイティブな環境では、多病院での電子カルテの共同所有が可能になり、電子カルテの低コスト化が期待できる。容量の追加も容易で、電子カルテのリプレイスも必要がなくなる。現在、開業医・小規模病院向けのクラウド・ネイティブな電子カルテは出始めてきているが、この先数年で大規模病院向けも提供される。リプレイスの適切な時期の見極め（勇み足にならないように）と、導入後のデータ活用を中心とする業務等、プロセスの変革が必要となってくる。

【ヘルスケアにおけるチームプレーとDXの活用】

チームプレーを行うには「①正しい方向に棒を立てる。②チーム内のベクトルを揃える」ことが必要であり、正しい方向に向かった指示、指示通りに動いているかのチェック、補正の指示が行われている事が重要である。それにはマクロ（鳥瞰図の視点）とミクロ（現場の視点）を併せ持つことが大切である。またベクトルを揃える方法としては、オーケストラタイプ（指揮者あり・リーダーが方向性を示す）と、ラグビーチームタイプ（指揮者なし・スマートフォン等の活用による情報共有、チーム内の可視化によるそれぞれの働き）が必要である。

最後に「なぜDXが必要なのか？」と改めて示され、今後の医療業界に求められる働き方＝「タスクシフティング/タスクシェアリング、患者を中心としたフラットな多職種協働、時間・場所に縛られない業務形態、ライフステージに合わせた柔軟な雇用形態、年齢・性別・国籍に依らないキャリア形成、自己犠牲を伴う労働慣行の見直し・是正、効率的な情報収集・集約・解析・共有」これらの課題を解決する事が必要であり、その方法としてのDX化を進める必要があると言える（DX化することが目的ではない）。また教育・運用・コスト管理も意識をした上でのDX化の必要性について、講義頂いた。

（宮津武田病院事務長・岸本 真）